

## 愛知県下における新生児、乳児の 在宅療法を要する児の実態と問題点

(分担研究：新生児、乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 西村 豊  
共同研究者 鈴木 賀巳

**要約：**乳児期に在宅療法の対象となる児の実態と問題点を把握するため、愛知県下の保健所、児童相談所、乳児院、身体障害者入所施設を訪問調査した。本来は保護者の問題で保育を主とする乳児院に中枢神経系を中心とする障害児が28%と1/4以上の高率に収容されていた。保育と同時に障害児看護の問題が大きかった。

**見出し語：**乳児の在宅療法、乳児院、障害児

**研究目的と方法：**乳児期に在宅療法の対象となる児の実態と問題点を把握するための基礎資料の一つとして、愛知県下の一地区の6保健の2年間の乳児検診と低出生体重児に対する家庭訪問の実状と全県下の乳児院に収容されている児の状態と問題点を訪問調査した。

**結果：**1) 4ヵ月時の乳児検診受診率は地区の6保健中5保健所が90%以上と高率であった。要精検率は検診医の経験、専門性により大差がみられた(3~30%) (図1)。2) 低出生体重児の保健婦による家庭訪問による指導率は62.3%と低率であった。3) 乳児院に障害児の占める割合が高いことが判った。1991年2月1日現在愛知県下の全乳児院入所者182名中乳児院に在籍のまま入院4名、重度通院18名、軽度通院29名

計51名25%であった(図2)。

**考案：**小児科医の保健活動の必要性を痛感し、2年前より当院小児科医を地域保健所に週1回、児童相談所に月2回定期的に派遣し、また10年来乳児院の全障害児を診療して来た経験から乳児の在宅療法の実態と問題点をある程度把握出来た。これを基に全県的に調査したが共通していえることは小児科医の積極的な小児保健活動への参加協力が乳児の在宅療法に必要で特に病院との関係が不可欠である。現状では、小児科医自身の認識、教育と同時に人的、社会経済的支援が必要である。また本来は保育が主である乳児院に障害児の占める割合が1/4以上となり、看護の占める比重が高いことが注目された。

図1 保健所別4カ月健診状況

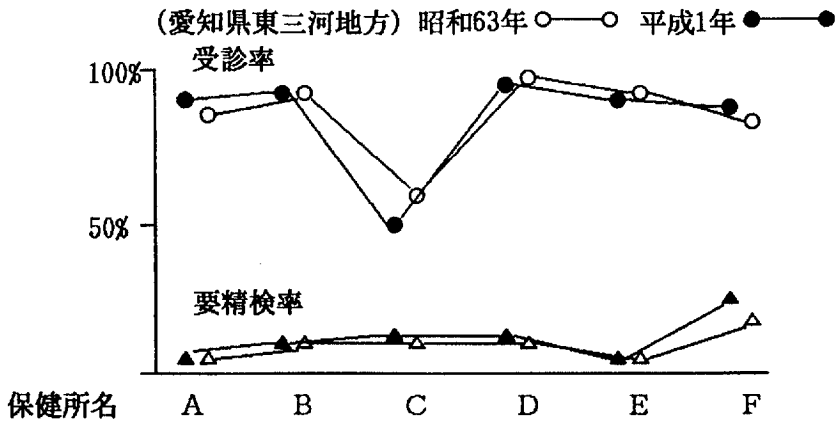
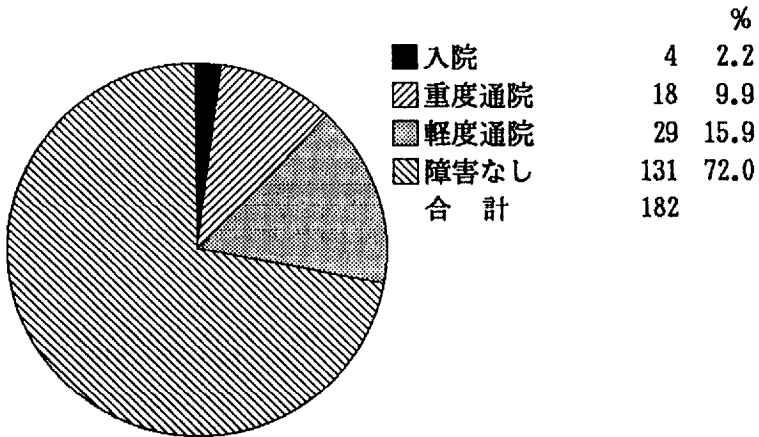
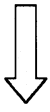


図2 乳児院における障害児

愛知県全体



1991,2,1現在



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳児期に在宅療法の対象となる児の実態と問題点を把握するため、愛知県下の保健所、児童相談所、乳児院、身体障害者入所施設を訪問調査した。本来は保護者の問題で保育を主とする乳児院に中枢神経系を中心とする障害児が 28%と 1/4 以上の高率に収容されていた。保育と同時に障害児看護の問題が大きいことが判った。